

◆久松久子 選 ~思ひ出の一句~

「疎開の子」

私の実家は茨城だが、小学校四年生の頃は戦争の真っ最中で、東京からの疎開の生徒が、ひとクラスに五、六人は入ってきた。

その一人に美子さんがいた。美子さんは小柄で可愛らしく歌が上手だったので、担任の若い男の先生もとても可愛がり、授業の前に一曲歌ってもらうのが日課となっていた。生徒も皆、それを楽しみにしていた。

いつの間にか、美子さんが田舎の言葉になり、私達が東京弁になり、川で目高掬いをしたり、桑の実を一緒に食べたりした。

美子さんとは女学校も一緒だったが、東京が復興して実家に戻られて、それきりとなった。九十二歳になった今、どうしていらっしゃるかしらとふと懐かしく思い出している。

桑の実に赤き舌見せ笑ひ会ふ 久子

「冤罪」

新聞やテレビで、冤罪によって刑務所に入った人のニュースを聞くことがあるが、どんなに辛かったことかと思う。

私が小学生の頃、東京から来た若い美しい女の先生が、私の組の担任教師になられた。戦争が激しくなり、田舎に引っ越して来られたのだった。生徒達は喜んで、三、四人ずつが先生の家を訪ねては話をするのが楽しみとなつた。

ある日、母が「そんなに行ってはご迷惑でしょう」と手土産にお菓子などを持たせるようになった。ところが、それがいけなかつたらしく、級友たちが私を仲間外れにするようになった。おまけに「先生の悪口を言っている」と無実の罪を造られ、告げ口をされてしまった。そして、それ以来、私に対する先生の目が冷たくなってしまった。

しばらくして席替えをした時のことだった。とりちゃんと云う大人しい子の隣になって喜んでいたのに、先生が突然、私の名前を呼んだ。そして、いきなり「後ろに立っていなさい。席替えに不服を言う者は許しません。誰でも友達なのです」と言い放った。あの美しい先生のお貌が険しくなっていた。私は「言ってません」とはつきり云ったが、聞く耳を持たないといった感じで、午前中ずっと立たされたままだった。

立たされながら後ろから全員の生徒を観察してみた。心友でいつも一緒に先生の家に行く級長の子と、その隣の子の二人だけが首をうなだれていた。先生の家にお菓子を持って行くのが気に入らなかつたのは、この二人だったんだなとピンときた。うなだれているということは、少しは良心があるのかもしれないとも思った。

結局、家に帰ってよいと言われるまで一日中立たされた。私は家に入るなり座敷にうつ伏せになって「わあああ」と泣いてしまった。家の者が全員寄つて来て事情を聞かれた。教室の後ろに一日立たされた冤罪を泣き乍ら話した。母は私の気持ちを先生に話してくれるかと思ったのに、「子どものする事よ。

気にしない、気にしない」と言っただけだった。その時、家の門のところで中を覗いている級友がいた。姉が見つけ、すかさず出て行って「卑怯者とは妹を遊ばせない！」と怒鳴ってくれた。級友は一目散に逃げて行った。

夜になって、あの子は謝りに来てくれたのかもしれないとふと思った。私は、このことは黙って我慢すればいいのだからと自分に言い聞かせた。

告げ口の罪を許せば秋氣澄む

久子

「ねんねこ袢纏(ばんてん)」

もうずいぶん昔のことである。私が長女を生んだ頃はベビーカーなど無くて、赤子をおんぶしている人がまだまだ多い時代だった。出産すると、実家の母が綿入りの「ねんねこ袢纏」と、おんぶ紐を送ってくれた。衿のところがビロードになっていて、子どもの顔にやさしく、親にも子にも暖かいのである。料理

や洗濯、掃除など、用事をするのにも両手が使えるのでとても重宝した。買い物に出る時も、家に子ども一人残す心配をしなくてすんだ。

ねんねこでスヤスヤ眠るだけだった子も、少し大きくなると衿から手を出すようになる。神社に行って拝んでいると、母の真似をして鈴紐を掴んで揺らしたりした。

最近は、ねんねこでおんぶしている人を見かけないが、ねんねこの子どもは、母の背の温もりに眠ったものだった。子どもが寝入って脱力すると、少し重くなる。親と子の体温が一緒になった、あの時の幸せな温もりと重みは、今でも背中に残っている。

ねんねこにねんねんころりねんころり 久子